



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聖書協会共同訳について
Author(s)	島先, 克臣
Description	日本基督教学会北海道支部2018年度公開シンポジウム「聖書『聖書協会共同訳』（近刊）：その特色と意義」。2018年7月16日。北星学園大学, 北海道。
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録, 5, 33-43
Issue Date	2021-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95140
Type	conference paper
File Information	jscsh_005_33.pdf



聖書協会共同訳について

島先 克臣

本日は、日本基督教学会北海道支部公開シンポジウムの講師の一人としてお招きくださりありがとうございました。

本日は、阿部包先生が新約から、また、山吉智久先生が旧約から、翻訳者としてのお立場でお話くださると思います。私は、本事業の準備段階からかかわり、事業が始まってからはコーディネーターとして今まで務めてきた者として「聖書協会共同訳」の概要についてお話をさせていただきます。

小冊子「聖書協会共同訳 特徴と実例」（日本聖書協会）に記されていますことは、みなさまに配布されていますので、なるべく重複しないようにお話ししたいと思います。

新翻訳事業の概要

翻訳事業の開始

本事業の目に見えるスタートは、2008年10月にもたれた諮問会議です。聖書協会は、2007年のキリスト教年鑑に基づいて会員数の多い順から30の教派、そしてキリスト教学校同盟に諮問委員の派遣を要請しました。諮問会議は、その時に応答してくださった教派から派遣された委員の先生方からなる会議です（この団体と委員のリストは聖書協会のウェブサイトで公開されています）。

その第4回目の会議で「翻訳方針前文」が採択されました。これは、もし聖書協会が新しい聖書翻訳に取り組むならばこのような聖書を生み出して欲しいという内容です。それは序文と7つの項目か

らなっています（これもウェブサイトで公開しています）。その中からいくつか重要な点を拾い出しますと、次のようになります。

- (1) カトリックとプロテスタントの共同訳事業とする
- (2) 礼拝で用いることを主要な目的とする
- (4) 日本語と文化の変化に対応させる
- (5) 聖書学、翻訳学などの成果に基づき、原典に忠実な翻訳を目指す
- (7) 注、引照、巻末解説、小見出し、などの組み合わせを考え、読者のニーズに応える努力をする

聖書協会理事評議員会は、諮問会議の答申を受けて 2009 年 12 月に事業の開始を決定し、関連諸団体からの推薦を受けて翻訳実務者を依頼、そして 2010 年 9 月から翻訳が開始されました。

翻訳実務

翻訳事業の実務者は、原語担当翻訳者 43 名、日本語担当翻訳者 19 名、編集者 44 名、検討委員 21 名、そして、外部モニター 20 名の合計 147 名で、それに朗読チェック者が加わります。翻訳の実務は概ね次のプロセスを通りました。原語担当翻訳者と日本語担当翻訳者が一つのチームとして訳文を作り、それを他のチームが見て 2 チームで検討する（翻訳者委員会）。2 チームが検討した原稿に朗読チェック者が意見を述べ、それを考慮した訳文を編集委員が検討する（編集委員会）。そのすべてのプロセスが、2017 年 12 月に終了しました。

しかし、それですぐに印刷に回るわけではありません。一年以上にわたって行なわれ、2018 年 3 月に完了したのが以下の作業です。

1. 訳語調整（一つの原語に対しどのような訳語をいくつかあてるかを調整） 9872 単語
2. 旧約、続編、新約の中における並行記事、新約における

旧約引用をできるだけ近づける作業 4852 セット

3. 注が基準通りに書かれているかの整理 (4393 個の注) と
引照の入力

4. ルビ振り

また、一般の方々のご意見をお聞きするためのパイロット版を
16,264 部頒布し、6,861 のご意見を伺いました。その中には貴重な
ご意見も多く、私たちが見落とした誤字脱字や意味のわからない文
の指摘がありました。また、批判が集中した箇所もありました。そ
のような箇所は随時、改定していきました。

出版に向けて

そのようなすべての作業が 2018 年 2 月末に終わり、次に印刷会
社に原稿を提出しました。組版、初校の校正を経て、2018 年 7 月
現在第二校の校正中です。今後、第三校まで行い、2018 年 12 月の
発行予定です。

『聖書 聖書協会共同訳』の基本情報

この新しい翻訳聖書の基本情報は次の通りです。

- 名称：『聖書 聖書協会共同訳』

引照・注付き中型版：旧新のみが 5,300 円、続編つきが
6,100 円

本文のみ小型版（旧新のみ）3,000 円

聖書協会共同訳の変化

次に、新共同訳と比べ、どのような点が変化するのかを具体例を
あげて見ていきます。これから申し上げるのは、すでにお手元にあ
る小冊子で取り上げていますので、時間の許す限り簡単にご説明し、
画像をお見せして、この度の概要のお話を終わりにいたします。

より簡潔な日本語

新共同訳は、「わかりやすいが冗長である」というご批判をいただきました。聖書協会共同訳では、より簡潔な訳文を目指しています。単語レベルでは、例えば、このような変化があります。

左が新共同訳、右が協会共同訳です。

恵みの御業→	義、正義（ツエデカー）
神に従う者→	正しき人（ツァディク）
神に逆らう者→	悪しき者（ラシャア）
主の慈しみに生きる者→	ご自分に忠実な者（ハスィド）

日本語の変化に対応

以前には、一般的でなかった言葉が、この三十年で広がってきています。そのような日本語の変化に対応しています。例えば、

コエンドロ→	コリアンダー
薄荷、いのんど、茴香→	ミント、ディル、クミン

最新の聖地考古学、植物学、動物学の発展を生かす

今回の翻訳事業では、聖書協会世界連盟が出版した3冊の書籍を参考にしました。それは、世界有数の聖書学者とイスラエルの聖書考古学、聖書植物学、聖書動物学の学者の協働の成果です。その結果、今まで分からなかったり、確信が持てなかったりした動植物名がはっきりしてきました。また、人が作った物も分かって来て、そのような成果を取り入れました。例えば、

植物

没薬→	シスタス香
アロエ→	沈香（じんこう）
琥珀→	ブドラク香
ミルラ→	没薬
恋なすび→	マンドレイク（脚注）

アビヨナ→	ケッパ→
メロン→	すいか
柳→	ポプラ

動物

いなご→	ばった
------	-----

いなごは旧約聖書の中でエジプト全土の作物を食い尽くした昆虫、また洗礼者ヨハネの食物として出てきました。以前は、いなごは「ばった」を含む広い意味を持っていましたが、最近では、より厳密な使われ方をしているため、何人かの動物学者からは、誤訳との指摘を受けてきました。アルベというヘブライ語は、中近東で今でも作物に大打撃を与えるサバクトビバッタを指します。そこで、新しい翻訳では、日本語の変化を考慮して、アルベを「いなご」ではなく、サバクトビバッタを指すものとして「ばった」としました。

蝮→	コブラ
----	-----

聖書に登場してきた蝮は、クサリヘビ科マムシ属に分類されるヘビの一種で日本に生息する毒蛇です。つまり、中近東にはいないのです。原語の「ツェファ」はサバククロコブラかエジプトコブラと考えられています。コブラは日本語としても定着していますので、コブラとしました。ところで、洗礼者ヨハネが「マムシの子らよ」というところは、このコブラとはまた違う「クサリヘビ」ですので、本文を「毒蛇の子らよ」とし、注に「クサリヘビ」と入れています。

かもしか→	ガゼル
-------	-----

今までの聖書で「かもしか」と訳されてきたヘブライ語のツェビはドルカスガゼルか、アラビアンガゼルを指すことが分かっています。ガゼルも日本語のなかで使われ始めていますので、より正確な訳語としました。

かもしか→	オリックス（脚注）
-------	-----------

「テオ」は、ヤギ亜科の「かもしか」でなく、ブルーバック亜科のオリックスです。オリックスは、野球チームを連想しますので、脚注で触れるにとどめました。

しみ（紙魚）→ 衣蛾（脚注）

「オシュ、セス」は、紙を食べるしみ（紙魚）ではなく、衣類を食べる衣蛾です。衣蛾といってもわかりにくいので、虫などと訳し、注に衣蛾と記しました。

人造物

人間が造ったものをみてみましょう。

箕→ 農用フォーク（脚注）

収穫した麦をふるいにかける「ミズレ」は、日本の箕ではなく、農用フォークを指しています。これは、脚注に出しました。

酒ぶね→ 搾り場

ぶどう酒を作るためにぶどうを搾る「イエケル」は、木の樽でなく、固い土や岩を掘って造ったものでした。新共同訳では、酒ぶねと搾り場が混在していましたので、搾り場に統一しました。

強い酒→ 麦の酒

古代中近東の穀倉地帯では早くからビールが生産されていました。メソポタミアでは紀元前 4000 年紀、エジプトでは紀元前 3000 年紀にはその記録があります。ビールはアッカド語で、シカルム、それがアラム語ではシェカルとなりました。実は、シェカルは聖書の中にもあります。ヘブライ語のシェカルも当然ながらビールを指すのです。旧約では 22 回、新約ではスィケラとして一回でできます。つまり、長い間、「強い酒」、あるいは、「濃い酒」、と訳されて来たものは、考古学と古代言語学の発展により、これは、強い酒でなく、単純にビールであることがわかって来ました。しかし、ワインとビールではあまりにも現代的ですので、洗礼者ヨハネは「ぶどう酒も麦の酒も飲まず」（ルカ 1:15）となります。

酵母→

パン種

酵母が発見されたのは顕微鏡が作られた後のことで、その研究が進んだのは一九世紀に入ってからです。それ以前は酵母の存在すら知られていませんでした。そこで、新共同訳で「酵母」とある部分は、「パン種」と訂正されます。

以上、動植物や人造物名の変化を見て来ました。

差別的表現、包括言語、女性の視点など

本事業では、不快と思われる言葉遣いを減らす努力をしています。

お前→

あなた

神やイエスが発する文言には、「お前」の使用を止めて欲しいとの要望が牧会者の方々からありましたので、そのようにしました。

はした女→

仕え女

「はした女」は、差別語であるとの指摘を受け、「仕え女」としました。

ユニアス→

ユニア

ロマ十六7ではユニアとあるのに、女性が使徒であるはずがないという理由で、男性の名前であるユニアスとなってきました。この度、原文通り、女性の名前のユニアとしました。

兄弟→

きょうだい

女性が明らかに含まれる場合は、昨今のジャーナリズムの傾向を取り入れ、ひらがなにしています。

「イエスをもてなした」→「イエスに仕えた」(マタハ 15)

「仕える」という意味のディアコネオーですが、食事の文脈では「給仕する」と訳されています。今まで、癒やされたペトロのしゅうとめは、「もてなした」とありましたが、食事とは限らないので、直訳の「仕えた」としました。

その他数多くの変化がありますが、単語レベルの変化はこの辺に

して、もう少し、神学に影響ある変化を見ていきたいと思います。

神学に影響のある変化

神の像

神の像に関しては、歴史的には神学的アプローチ（存在論的、関係的、機能的）が主流でしたが、旧約学の発展によって明らかになったことがあります。メソポタミアの前 3000 年紀後半は、都市国家が反映した時代です。そのラガシュという都市はグデアという王によって栄え、アブラハムが出たウルが南エソポタミアの覇権を握るまで、ラガシュが中核的な都市でした。古代メソポタミアでは、王は自分に似せた像を自分の領土の各地に作り、その地域が誰の支配の下にあるのかを知らしめました。これを当時の言葉（アッカド語メソポタミア方言）でツアルムと言いました。訳すと「像」で、ヘブライ語ではツェレムです。

つまり、王国の辺境に置かれた王の像（ぞう）は、そこでの王の支配を示しました。興味深いことに当時の王たちは、自らを「神の像」と称しました。それは、「目に見えない神の目に見える代理として、愛と正義をもって治める地上の王である」ことを意味しました。古代中近東の王たちが残した法律の碑文を読みますと、正義、公正、弱者の救済といった社会正義を国内に実現させる務めがあったことがはっきりと分かります。聖書では、

神は人を自分のかたちに創造された。

神のかたちにこれを創造し

男と女に創造された。

とあります。つまり、当時王だけを指した「神の像」が全人類に使われています。これはどのような意味でしょうか。それは、人は目に見えない神の、目に見える代理人として世界を治めるために造られたということです。しかも、神に似たものとして、神の愛、神の

正義をもって治める、そのために人間が創造されたということが、強いメッセージで伝わってくるのです。新共同訳の「かたどって」ではなく「神のかたち」としたことで、このような旧約学の進展がより明瞭に伝わるようになったと思います。

このことは、新約聖書にも関係してきます。創世記 1:27 で「神のかたち」と訳されたツェレム・エロヒムは 70 人訳ギリシア語旧約聖書ではエイコン・セウーです。このエイコン・セウーが新約に登場します。

2 コリ 4:4 神のかたち (エイコン・セウー) である
キリスト

コロ 1:15 御子は、見えない神のかたち（エイコン・セウー）

キリストがエイコン・セウと呼ばれています。キリストは、神のありかたを目に見える像で示し、神の代理として世界を治めることを意味しています。キリストこそ、罪のない真の人間、第二のアダムです。

また、エイコン・セウがキリスト者を指して使われています

ロマ 8:29 神は前もって知っておられた者たちを、
 御子のかたちにならうとしようと
 あらかじめ定めておられました。

2 コリ 3:18 栄光から栄光へと、主と同じかたちに
変えられていきます。

キリスト者はキリストのかたちに変えられていくとあります。すなわち、罪によって歪められた人間性と使命が、聖霊によって回復していくことを示しています。

コロ 3:10 造り主のかたちに従ってますます新たにされ

コロサイでははっきりと私たちが造り主のかたちに新たにされて

いくとあります。

本来の人間の姿が、聖霊によって回復されていく、そして、ついには、世界を相続し、王として治めるとあります。

黙示録 22:5 彼らは世々限りなく支配する。

「支配する」は、「王となる」とも訳される言葉です。キリストが地上にもう一度こられ、万物が回復（使徒 3:21）するとき、信仰者は地上で、回復された神のかたちとして、世界を愛と正義をもってキリストとともに治めることになります。ここにおいて、天地創造の目的が完遂されることになります。旧新約の訳語を合わせたことで、聖書全体を貫くものが見えやすくなったのではないかと考えています。

ピステイス・クリストゥ（ロマ 3:22）

この句が、キリストへの信仰なのか、キリストの真実なのかという論議が、欧米ではすでに数十年されてきました。ルーテル派の著名な神学者、鈴木浩先生は、この句には、「キリストへの信仰」と「キリストの真実」の二つの意味がある、すなわち両義的であり、文脈によって訳し分けなければならないとおっしゃっています。ロマ書 3:21-26 の強調点は神の義です。そこでは、人は、信仰以前に、「キリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより」義とされるということが強調されています。そこで、この文脈では、ピステイス・クリストゥは、「キリストの真実」と訳しました。

補う動詞の変更（ロマ 3:22）

ロマ書 3:22 の「現された」とあるところは、従来では「与えられた」となっている箇所です。ギリシア語には動詞はありません。なぜなら、この名詞句は、3:21 の「神の義」と同格で、それを説明している句からです。そのため、動詞を補うならば、21 節の「現される」でなければなりません。いくつかの最近の注解書はその立場を取っています。この変化は、神の義に関する論議に少なからず影響

を与えるものではないかと思います。

「嗣業」をやめて「受け継ぐ」「相続する」などに

口語訳以来長く使われてきた「嗣業」は、一般の方々が理解できないという理由で使わないことになりました。その結果、新約との結びつきが見えやすくなったと思います。

ロマ 4:13

世界の相続人になるという約束が、アブラハムとその子孫に対してなされたのは…信仰の義によるのです

ユダヤ人がカナンの地を受け継ぐ（相続する）という約束は、実は、信仰による新しい神の民であるキリスト者が、世界全体を受け継いで（相続して）神の国とするというものだったとパウロは述べます。全世界に救いをもたらし、被造世界全体を正しく治めるようになることは、もう一度ロマ書 8 章で取り上げられ、終末の希望につながっていきます。「嗣業」をやめて、新約と同じ言葉を使ったことにより、世界の相続人となるキリスト者の使命がより明らかになったのではないかと思います。

以上、聖書協会共同訳が新共同訳に比べて変化した点を見てきました。間もなく出版されますので、是非お手にとって読んでいただければと思います。

（しまさき・かつおみ 日本聖書協会）